

## 学位論文審査報告書

氏 名： 脇 智子

学位の種類： 博士（文学）

論文題目： 存覚教学の研究 ―初期真宗における教学史的展開の考察を通して―

### I 前言

脇智子氏が提出した学位請求論文「存覚教学の研究 ―初期真宗における教学史的展開の考察を通して―」について、審査の結果を報告する。

本論文が研究対象とする存覚(1290～1373)は、親鸞の『教行信証』の最初の註釈書である『六要鈔』の著者として知られ、本願寺の第3代宗主・覚如の長子である。

その教学は後世の真宗教学に大きな影響を与え、『教行信証』の研究をはじめとする多くの側面において教学に貢献したのであるが、反対にその教学に批判的な見解が示されることもあった。

脇氏のこの論文は、その存覚の教学が正当な評価を得ないまま今日に至っているのではないかという疑問をもとに、先行研究を詳細にたどりながら、従来の存覚研究に存在する問題点について、

- (1)法然の念仏往生の法門を基盤とし、親鸞教義の独自性があまり強調されていないと見られるが、存覚教学が形成された過程について検討されていないこと。
- (2)存覚の教学と父・覚如の教学との関係について、相違点のみが強調されることが多く、共通点に注目されていなかったこと。
- (3)従来の研究は、存覚の著作の歴史的背景や存覚個人の間人関係等の状況について触れられておらず、真宗史学の研究成果が取り入れられていない傾向があること。

という点をあげて存覚教学を再検討し、この従来の研究の問題点をふまえて、真宗教学史における存覚教学の意義を再評価しようとするものである。

本論文は、存覚教学および存覚以後へ展開した教学を通してではなく、初期真宗からの教学史的展開を通してその意義を明らかにするという枠組みで行われた研究であるが、存覚、覚如の著作を成立の時期を区分することによって考察するとともに、念仏論、報恩論、善知識論という各論の内容を検討するという方法によって、存覚教学を明らかにしたというところにその特色を見ることができる。

論文は、B5判で本文は50字×16行の484頁(400字詰換算で968枚、註を含む)で生まれ、巻頭に目次、巻末に存覚関連年表および参考文献が付されているという体裁である。真宗学の体系の中では真宗教学史の分野の研究である。

### II 目次

本論文の目次は以下の通りである。

序論

## 第一章 存覚教学に関する先行研究と課題

### 第一節 存覚教学全般の先行研究にみる課題

第一項 通説的研究とその問題点

第二項 本願寺との関係を論じる研究とその問題点

### 第二節 存覚の念仏論研究にみる課題

第一項 通説的研究とその問題点

第二項 念仏論の全体像を論じる研究

第三項 近年の研究成果

### 第三節 存覚の報恩論研究にみる課題

第一項 伝統的研究とその問題点

第二項 本願寺との関係を論じる研究とその問題点

第三項 近年の研究成果

### 第四節 存覚の善知識論研究にみる課題

第一項 本願寺との関係を論じる研究とその問題点

第二項 初期真宗教団との関係を論じる研究とその問題点

小結

## 第二章 初期真宗教団の教学の研究

一覚如教学・存覚教学の形成過程を探る前提として一

### 第一節 初期真宗教団全体の教学理解

第一項 初期真宗教団の宗派意識

第二項 初期真宗教団の教学的傾向

第三項 初期真宗教団の史料

### 第二節 荒木門徒系の教学

第一項 荒木門徒系の特色と著作

第二項 荒木門徒系の念仏論

第三項 荒木門徒系の報恩論

第四項 荒木門徒系の善知識論

### 第三節 鹿島門徒の教学

第一項 鹿島門徒の特色と著作

第二項 鹿島門徒の念仏論

第三項 鹿島門徒の善知識論

### 第四節 高田門徒の教学

第一項 高田門徒の特色と著作

第二項 高田門徒の念仏論

第三項 高田門徒の報恩論

第四項 高田門徒の善知識論

小結

### 第三章 覚如教学の再検討 ―初期真宗教団の教学との関連を中心に―

#### 第一節 覚如の人間関係と著作の時代区分

第一項 第一期の人間関係と著作

第二項 第二期の人間関係と著作

#### 第二節 覚如の念仏論の再検討

第一項 初期真宗教団の念仏論との共通点

第二項 初期真宗教団の念仏論との相違点

#### 第三節 覚如の報恩論の再検討

第一項 初期真宗教団の報恩論との共通点

第二項 初期真宗教団の報恩論との相違点

#### 第四節 覚如の善知識論の再検討

第一項 初期真宗教団の善知識論との共通点

第二項 初期真宗教団の善知識論との相違点

小結

### 第四章 存覚教学の研究 ―初期真宗教団および覚如の教学との関連を中心に―

#### 第一節 存覚の人間関係と著作の時代区分

第一項 第一期の人間関係と著作

第二項 第二期の人間関係と著作

第三項 第三期の人間関係と著作

#### 第二節 存覚の念仏論

第一項 初期真宗教団および覚如の第一期の念仏論との共通点

第二項 覚如の第二期の念仏論との共通点

第三項 存覚における行信関係の構造

#### 第三節 存覚の報恩論

第一項 初期真宗教団および覚如の報恩論との共通点

第二項 初期真宗教団および覚如の報恩論との相違点

第三項 存覚の報恩論の全体像

#### 第四節 存覚の善知識論

第一項 初期真宗教団および覚如の善知識論との共通点

第二項 初期真宗教団の善知識論との相違点と存覚の指導

第三項 覚如の善知識論との相違点

第四項 存覚の善知識論と獲信者の教団

小結

結論

## III 論文の要旨

序論

序論には、本論文の問題意識と論述の手続きが述べられる。

まず存覚の教学について、肯定的・否定的の両傾向の評価がなされてきた要因を探って行研究の問題点に言及し、前述した、(1)存覚教学の形成と初期真宗教団の関係が明らかにされていないこと、(2)存覚教学の形成過程における覚如教学の影響の有無も検討する必要があること、(3)従来の存覚に関する真宗学分野の研究が真宗史学の研究成果を十分に取り入れていないことという三点の問題をあげる。

そして本論文の論述の手続きが述べられるが、以上の三の問題点を解決し存覚教学の意義を再検討するため、まず第一章では、従来の存覚教学研究の上記の三つの問題点について詳述しその課題を明確にする。次いで第二章では、存覚教学の形成に影響を与えた初期真宗教団の教学の特徴を明らかにする。また第三章では、第二章で考察した初期真宗教団の教学と覚如教学の関係に着目し、従来の覚如教学の位置づけについて再検討する。そして第四章では、初期真宗教団・覚如との教学的関係および人間関係に留意しながら、存覚教学の特色を考察する、という本論考の手続きおよび構成が述べられる。

そして本論文が、存覚教学における念仏論、報恩論、善知識論を、初期真宗教学史の中において把握するということと共に、従来不鮮明であった存覚教学独自の意義を見直すことを目的とすると述べられる。

## 第一章 存覚教学に関する先行研究と課題

第一章では、従来の存覚教学研究を概観し、その問題点と課題を指摘しつつ、本論文で考察する論点が整理される。まず第一項では、存覚教学全般に関する先行研究を時系列的に確認し問題の所在を明らかにする。そして第二項以降では、存覚教学の各論、すなわち念仏論、報恩論、善知識論について論じられた研究を概観し、その問題点や参考にすべき点について述べられる。

最初に、従来の存覚教学研究の全般に関する問題として、存覚教学と初期真宗教団や覚如の教学との共通性に留意されていないところがあり、存覚教学の形成過程を論じる上でこの点に対する検討を行うことは不可欠であることを指摘する。また存覚教学には本願寺教団の運営の意図があるとする見解があるが、これは存覚著作に対する執筆依頼者の状況や、当時の時代背景を考慮すれば成立しない見解であること述べる。

念仏論に関する研究の問題としては、従来、存覚の念仏論の中心的思想とされる念仏往生・称名正定業の重視の傾向が、如何なる過程を経て形成されたかを検討する必要があることを述べ、存覚の行信理解については、行信不離や行信不二を説いていると指摘されているが、行信関係の構造や名号理解との関係性など、未だ明確になっていない点も存することを指摘する。さらに、近年指摘されている覚如の念仏論との共通点にも留意しつつ、称名報恩や名号正定業に関する言及も含めて、存覚の念仏論については幅広い側面を考察せねばならないことを述べる。

次に、従来の報恩論研究の問題について、先行研究では父母や国王といった世俗的事項に関わる報恩思想に焦点が当てられているが、そこでは仏道上の報恩思想については詳細に論じられていない上に、報恩論の根拠とされている存覚の著作も限定的であるの

で、存覚の報恩に関する言及を網羅的に把握し、その全体像を考察する必要があるとしてその問題点を明らかにする。また従来、伝道的意義があるとされる父母に対する報恩思想については、存覚が指導した荒木門徒系の明光派教団に対する指導としての側面も考察する余地があることに言及する。

最後に、善知識論に関する研究の問題について、従来、存覚の善知識論は初期真宗教団の善知識帰命説と類似する面があると指摘されているが、この見解は存覚の一部の言及のみを根拠としているため、存覚の善知識に対する言及を広く検討して論じるべきであることを指摘する。また、近年では、初期真宗教団と存覚の善知識論の関係について論じた研究がみられるが、その成果をもとに、より詳細な文献の検討を行う必要があることを述べる。またその際には、関東の原始的な初期真宗教団から存覚が受けた影響と、西日本の初期真宗教団に対し存覚が如何なる指導を行ったのかということ、区別して考察してゆくべきことを述べる。

## 第二章 初期真宗教団の教学の研究

### —覚如教学・存覚教学の形成過程を探る前提として—

第二章は、初期真宗教団における教学に注目する。初期真宗教団の教学は真宗教学の嚆矢と位置づけられるが、従来この分野に関する研究は多くはなされていない。本章では、覚如・存覚の教学を論じる前提として、彼等に影響を与えたと思われる初期真宗教団の教学的特色について考察する。

それは具体的には、阿佐布門徒の了海、甘繩門徒の誓海、仏光寺了源など、存覚と深く交流した荒木門徒系の著作・掟書を中心に考察し(第二節)、さらに鹿島門徒の信海の著作をとりあげ(第三節)、高田門徒の真仏、顕智の要文集を用いて検討(第四節)されるものである。

第一節では、まず初期真宗教団全体において、自己の法系を法然の専修念仏の流れを汲むものと理解する宗派意識があり、聖徳太子信仰や光明本尊の依用、善知識の尊重などの共通の教学的傾向があることを指摘し、続いて第二節以降の各門徒独自の信仰形態や特色を論じた上で、念仏論、報恩論、善知識論の傾向を考察してゆくという論述になっている。

はじめに念仏論について、初期真宗教団では全体的に善導・法然の教えを基盤とした念仏往生説が重視されていることが述べられる。また、行信関係については、「念仏往生を信じる」という表現や「名号を信じて称する」という表現が見られ、いわゆる行信不離を示す意図が窺えるとする。そして称名報恩については、高田門徒の要文集に親鸞著作の引文がみられる程度で、初期真宗教団では重視されていないことが指摘されている。さらに、天台宗や真言宗等の他宗の念仏思想にも留意する一方で、聖道門に対して念仏門の凡夫相応の教法としての意義を主張する側面がみられ、念仏論を通して聖道門との対峙を意識する姿勢が窺えるとしている。

次に、報恩論について、初期真宗教団では全体的に談義・唱導などの伝道活動が盛んで、その際には、太子や父母、神祇の恩などについて説かれる事実があるとし、また当時の世俗社会では追善の仏事や報恩のための造立供養が一般的に行われていたが、初期

真宗教団にも同様の傾向がみられること、これに対して仏恩報謝や称名報恩などの説示はほとんどみられないことを述べる。したがって、初期真宗教団では報恩の教義的意義を示すというよりも、伝道等の現実的側面に即して報恩を説く傾向があったことを述べる。

最後に、善知識論について、初期真宗教団全体においては、善知識の直説や行者の獲信における善知識の教導が重んじられているとする。また、浄土門や各教団の師資相承も重視されていたとし、その師資相承の際には、教団指導者の著作の相伝や面授が行われていたことを確認する。さらに、特に荒木門徒系や鹿島門徒においては、善知識帰命の傾向が濃厚で、経釈の文に独自の解釈を施して善知識帰命の論理を構築していることが述べられる。この荒木門徒系では、師弟間の紛争に関する規定も具体的に定められていることも指摘する。

この点について、従来は教団指導者である善知識の組織統制としての意味があると指摘されてきたが、この点に加えて、未だ確立した真宗教学が存しなかった初期真宗の状況においては、何が正統な教えであるかを確認するために善知識の教えが重視されたと考えられ、教学的問題との関係から善知識帰命の傾向が生じた可能性があることを指摘している。またこのように荒木門徒系と鹿島門徒の善知識論には共通点が多くみられることなどから、各教団は独自の相承を重んじながらも、時に同じ親鸞門流の教団の教学を参照し、相互に影響を受けつつ教学を確立したと考えられると述べる。

### 第三章 覚如教学の再検討 ―初期真宗教団の教学との関連を中心に―

第三章は、覚如教学の特色について、初期真宗教団の教学との共通点・相違点に留意しながら再検討を行っている。

第一節では、覚如教学を再検討する前提として、覚如の各著作の成立背景や教学的傾向を考慮した上で、覚如著作を初期真宗教団と比較的良好な関係を有していた第一期（前期）と、初期真宗教団との不和が顕著となり覚如独自の教学的傾向が示される第二期（後期）に分類し、第二節以降において、覚如の念仏論、報恩論、善知識論の各論に関する論述がなされている。

まず念仏論については、第一期では善導・法然の念仏往生説を重んじ、行信不離や、聖道門を意識して念仏門の意義を説くといった初期真宗教団との共通点が多くみられるが、第二期になると、覚如は信因称報や信一念業成を強調して、他の親鸞門流を批判するようになっていることが指摘され、このような覚如の念仏論の変遷は、大谷廟堂を巡る初期真宗教団との関係悪化に伴うものであらうと考えられている。

次に、報恩論については、師に対する追善や聖徳太子の恩を説く点など、初期真宗教団との共通する点があり、第一期、第二期を通じて見られるとする。ただし、覚如は称名や伝道が仏恩報謝となるとして報恩を教義的に位置づけており、この傾向は初期真宗教団にはみられない覚如独自の報恩観であると述べる。

また、善知識論については、覚如の第一期著作を中心に初期真宗教団の善知識論との共通点が多くみられるとする。例えば、善知識の教導や面授、著作の相伝を重んじ、浄土門の師資相承を重視する傾向や、本願成就文の「聞」の解釈を通して、獲信における

善知識の教導を強調する点などである。これに対して第二期になると、覚如は三代伝持の血脈を主張し、初期真宗教団の善知識帰命説を批判していくと指摘される。このような覚如の善知識論の変遷も、念仏論と同様に初期真宗教団との関係の悪化に起因すると思われるとし、さらに、『改邪鈔』第十八条の善知識に関する言及には、『改邪鈔』に先行して成立した存覚著作の表現と類似する表現が見られることから、存覚の善知識論の影響も窺えるとする。

これについて、従来は覚如教学の第二期の傾向にのみ焦点が当てられていたが、第一期を中心に、覚如教学には初期真宗教団の教学との共通点が見られるのであり、第一期の教学も覚如教学の一側面として留意せねばならないこと、また覚如の第一期著作の成立期には、存覚は覚如と同居し法門の指導も受けていたので、覚如の第一期の教学的傾向が存覚教学に与えた影響についても考察を要すること、さらに存覚が覚如に与えた影響の有無にも留意しつつ、覚如と存覚の教学間の相互的関連も明らかにする必要があることが述べられる。

#### 第四章 存覚教学の研究 ―初期真宗教団および覚如の教学との関連を中心に―

第四章は本研究の中心となる存覚の教学についての考察であるが、第一章に述べられた存覚研究の問題点に留意しながら、従来、指摘されていない存覚教学の特色を明らかにする章である。

第一節では、はじめに考察の前提として、存覚の人間関係の変化を中心とした時代背景を考慮しつつ、存覚の著作を第一期、第二期、第三期と分けて、各時代の存覚の教学的傾向を明らかにする。

これを踏まえて、第二節以降は、存覚の念仏論、報恩論、善知識論について、初期真宗教団の教学および覚如教学との共通点、相違点を分類整理した上で検討を加え、初期真宗教史における存覚教学の在り方を把握しようというものであるが、それによって存覚教学には初期真宗や覚如の教学を継承している面と、独自に展開させている面とがあることを指摘し、同時に従来指摘されていない存覚独自の教学の意義について論じるものである。

まず念仏論について、従来から存覚の念仏論の特色とされる念仏往生・称名正定業の重視や、行信不離の立場、聖道門を意識して念仏門の意義を説く傾向は、初期真宗教団や覚如の念仏論の影響が窺えるところとし、さらに、信因称報説や信一念業成説については、その成立自体は存覚が覚如に先行しているが、表現の面では覚如から存覚への影響がみられ、両者の念仏論には相互的な関連が存するとする。

次に報恩論では、父母の恩、財宝を用いた報恩等、現実に即した報恩を説く点は、初期真宗教団と共通し、称名や伝道の仏恩報謝としての意義を説く点は覚如と共通するとする。また、当時の伝道において報恩説話が説かれたが、その際には絵伝等の視覚史料が用いられたことについて、明光派教団が存覚の指導により制作した『親鸞絵伝』『法然絵伝』は、覚如が制作した絵伝の絵図から影響を受けていることを、関連する研究を踏まえて指摘する。さらに、聖徳太子の恩を説く点などは初期真宗教団と覚如の両者の影響が窺えるが、これに対し、国王に対する報恩は存覚独自の思想であり、当時の親鸞門

流の念仏者を当時の法難から擁護するための理論として構築されたものと見ている。

次の善知識論については、存覚は善知識の直説や教導、指導者の著作の相伝や面授、浄土門の師資相承を重んじるが、これは初期真宗教団と覚如の第一期の善知識論と共通するところであるとする。しかし、存覚は東国門徒にみられた善知識帰命説を受容することなく、西日本の仏光寺教団や明光派の善知識帰命の傾向を緩やかに指導するため、著作をものしたり、また視覚史料の改変を行っていること、また、存覚には三代伝持の血脈説の主張や、善知識帰命説を激しく批判する傾向はみられないが、それ以外の点は覚如の善知識論と大きな食い違いはないとする。

以上のように、本章は存覚教学の特色を、第二、第三章において検討された初期真宗教団や覚如の教学との関係から考察しているが、それに加えて従来は指摘されていない存覚教学の意義をも明らかにしている。まず念仏論については、存覚は善導・法然のみならず親鸞著作の文を引用し念仏往生や称名正定業の意義を説いていること、さらに存覚は称名正定業を中核として付随的に称名報恩を説くこと、また存覚の行信理解について、先行研究では留意されていない文を再検討し、親鸞教義と共通する側面についても言及している。

また報恩論について、存覚の報恩思想の全類型を検討して、存覚は全ての時期の著作において親鸞の報恩思想を基盤とし、仏道上の報恩について述べているが、世俗に関わる報恩の言及は伝道材料の提供や他宗との対論といった個別的情况を背景として述べられたものであり、限定された時期にしかみられないことを明らかにしている。

さらに前述の善知識論について、存覚は「善知識」という語の意味として、指導者を意味する「教授の善知識」のみならず「同行の善知識」の意味もあることを述べているとし、この姿勢は全ての時期の著作に見られる善知識論の基底をなす理解であるとする。また存覚は、善知識を獲信者であると位置づけ、同じ獲信者たる指導者と同行とが共に助け合いながら念仏者集団を形成することを志向しているという、存覚の善知識論の特色を明らかにしている。

## 結論

本論文は、序論で述べられた従来存覚教学研究の三つの問題点を克服し、初期真宗教学史の範囲の中で存覚教学を再検討して、存覚教学を再評価するものとなった。そしてその結果得られた成果を大きくは二点あげている。

一点目は、存覚教学を初期真宗教学史の潮流の中に位置づけたという成果である。初期真宗教学史は、初期真宗教団の教学から覚如教学、覚如教学から存覚教学という一方向的な流れのみで把握できるものではないことを述べる。そしてその理由を、初期真宗教団の教学と存覚教学との間、あるいは覚如教学と存覚教学の間には、相互的関連性が存すること、つまり、存覚教学は初期真宗教団の教学や覚如教学を継承あるいは展開する形で成立した面があり、初期真宗教団や覚如もまた、存覚の教学に影響を与えたり影響を受けた部分があることが知られるからであるとする。三者は共に親鸞が説いた真実の教えとは何かを真摯に問い、その姿勢を互いに参照し合いながら教学を構築したと言えるのであり、このような初期真宗教団、覚如、存覚の教学は、真宗教学史の原点とし



て位置づけることができ、真宗教学史全体を理解していく上でも重視されるべきであると述べられる。

二点目の成果は、存覚教学の評価を新たな視点から見直した所にあるとする。特に重要なのは、存覚の念仏論、報恩論、善知識論ともに、親鸞思想を基盤とする面があるという点である。さらに、従来の存覚教学の各論の研究では、主に中核的思想のみに着目されていたが、本論文では存覚の人間関係や時代背景を考慮し、それに伴う存覚の思想の時代的変遷に留意しながら、存覚教学の各論における中心的思想のみならず付随的思想にも検討を加えて、各論の全体像を明らかにすることができた点であるとする。

以上、存覚の教学と初期真宗教団や覚如の教学との相互的関連性を明らかにして、存覚教学を初期真宗教学史の展開の中に位置づけ、存覚教学を再評価できたところに本論文の意義があると結ばれるものである。

#### IV 審査委員会の評価

脇智子氏の本論文について、審査を行った審査委員会の評価は、概ね良好なものであった。

氏の問題意識は存覚の教学が正当な評価を得ないままに今日に至っているのではないかという疑念をきっかけ起こったものであるが、第一章では、先行研究を丁寧にたどりながら従来の研究に存在する問題点を明らかにしていること、そしてその問題を克服する論を全体に展開していることは、問題意識に対する論述の手続きからしても、全体を通しての論理の一貫性を見ても高く評価できる論文となっていることが認められた。

第二章は、初期真宗教団の教学を考察するものであるが、それほど豊かではない残された資料をもとにしながら、丁寧に検討して、これを真宗教学史の嚆矢と位置づけ、存覚を含むその後の教学史展開の研究に不可欠の課題として論述した発想は評価されるべきところであり、先行研究や広範な資料の丁寧な扱い方なども良好なものであった。

ただ審査委員会では、歴史的な手続きとして、「初期真宗教団」とは、どの時期を指すものかを定義すべきであるという意見が出されたこと、また関連して「初期真宗教学」という語でその教学を括ることができるかという問題が出されたが、これについて一応の回答がされ、審査会では一応の了解が得られたが、厳密な表現としては一考されなければならないところであろう。

第三章は、従来の研究において、覚如教学は存覚教学と対照的であるという通説的見解があったが、本論文では、覚如の著作を前期と後期に分けて再検討することによって、覚如の教学が変遷していること、また初期真宗教団と覚如の関係も明瞭になることが論述された。

このような覚如教学考察の方法を用いることによって、確かに覚如教学が単純に一色でないことも明らかになっているし、初期真宗教団との人間関係によって変遷した覚如教学の様相や特色がより明らかになっていると言えるものであると評価された。

第四章は本論文の中心となる存覚教学についての論考である。ここでも考察の前提として、存覚の人間関係の変化を中心に時代背景を見ながら、初期真宗教団や覚如との関係を考察するについて、まず存覚の著作を第一期～第三期に分けて検討するという方法

がとられ、それぞれの時期における存覚の教学的傾向を確認している。この方法によって論述が明瞭になっていることを認めることができると評価された。

また存覚の念仏論、報恩論、善知識論についても、広く資料を渉猟しながら初期真宗教団の教学および覚如の教学とが相互に関連していることを論述していることも、説得力のある主張に結びついているとすることができる。さらに各論においては、従来の研究では指摘されていなかった存覚教学の意義について、新たな知見を提示したものとなった。

審査委員会では、存覚自身の教学形成史に踏み込まれていなかったことや、論述の上で断定できると思われる部分にも「考えられる」「推察できる」という控え目な表現が少なくないことなど、いささかの表現上の問題点についても意見が出されたが、本論が初期真宗教団から覚如、存覚にかかわる文献を実に広範かつ丁寧に扱いながら論証されようとしていることが認められ、また時代背景や時期を区切って研究の枠組みを定めながら考察を進めていることが、論述により高い説得力をもたらす結果となったと評価された。

審査委員会は、本論文における先行研究の評価、論理的な考証の方法と論述、またそれらによって導かれた結論が妥当なものであることなどを認め、本論文が学術的価値を有する研究であり、先行研究を一步進めた優れた論文であることを評価するものである。

以上、審査の結果、本審査委員会は、脇 智子氏 が龍谷大学学位規程第3条第3項に基づき、博士(文学)の学位を授与される十分な資格を有するものと認めるものである。

2016(平成28)年7月13日

主 査：深川 宣暢  
副 査：龍溪 章雄  
副 査：中川 修